

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと  
主 女 弟 子 は 復 活 の 光 お 音  
づれ を てんしより ききうけ えて、  
天 使 聞 受  
げんそよりの ていざいをふる いすて、しと  
原 祖 定 罪 振 棄 使 徒  
にほこりてい え り、し はほろぼさ  
誇 曰 死 滅  
れ、ハリストスカ みはふくか つして、せかいに  
神 復 活 世 界  
おおいなる あわれみをたま えり。  
大 憐 賜

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしく どうざなるもの、ちゅう  
使 徒 等 同 座 者 忠  
じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい  
實 神 智 役 者 聖  
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛 愛  
にみちた るうつわ、わがくにのこう  
満 器 我 國 光  
しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
照 お 者 亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界爲生命賜うせい

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき  
光榮父子おとせいしんき歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾は初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
外來者知れども、ハリストスの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光暖かきをながし、爾のて敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
屬神子爲あし、かれらにか神

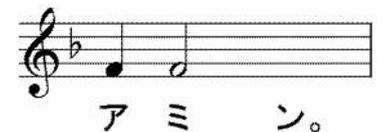
みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。  
 わがきゆうせいしゅおよびしょくざいしゅはかみと  
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神  
 して、ちにうまれしものをかせより  
 地 生 者 を 桎 梏  
 ときて、はかよりふくかつせしめ、  
 釋 墓 復 活  
 ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして  
 地 獄 門 破 主 宰  
 みっかめにふくかつしたまえり。  
 三 日 目 復 活 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 めよ。こうえいはちちとことせいしん  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 あわれめよ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
主 爾 工業 何 大

み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>わ たましい</sup>我が <sup>しゅ ほ あ</sup>靈よ、主を讃め揚げよ、<sup>しゅわ かみ</sup>主我が神よ、<sup>なんぢ いた おおい</sup>爾は至りて大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
主 爾 工業 何 大

み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
皆 智 慧 以 作

誦經) <sup>しゅ なんぢ しわざ なん おお</sup>主よ、爾の工業は何ぞ多き、

み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
皆 智 慧 以 作

【 <sup>アポストロス</sup>使徒經 203 端 ガラティヤ書 2 章 16 節～20 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒パヴェルがガラティヤ人<sup>じん たつ</sup>に達する書<sup>しょ よみ</sup>の讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>ひと りっぼう</sup>人は律法の <sup>おこない</sup>行に由るに非ず、<sup>よ</sup>唯 <sup>あら</sup>イイスス・<sup>ただ</sup>ハリストスを <sup>しん</sup>信ずるに由りて <sup>よ</sup>義と <sup>ぎ</sup>せらるるを <sup>し</sup>知りて、<sup>われら</sup>我等も <sup>しん</sup>ハリストス・<sup>しん</sup>イイススを <sup>よ</sup>信ぜり、<sup>りっぼう</sup>ハリストスを <sup>よ</sup>信ずるに由り、<sup>りっぼう</sup>律法の <sup>おこない</sup>行に <sup>よ</sup>由らずして、<sup>ぎ</sup>義と <sup>ため</sup>せられん <sup>けだしりっぼう</sup>爲なり、<sup>おこない</sup>蓋 <sup>よ</sup>律法の <sup>ひとひとり</sup>行に <sup>ぎ</sup>由りては、<sup>ぎ</sup>人 <sup>ひとり</sup>一も <sup>ぎ</sup>義と <sup>せ</sup>せらるるなし。若し <sup>も</sup>我等 <sup>われら</sup>ハリストスに <sup>よ</sup>由りて <sup>ぎ</sup>義と <sup>もと</sup>せられん <sup>みづから</sup>ことを <sup>な</sup>求めて、<sup>お</sup>自 <sup>お</sup>も <sup>ざい</sup>猶 <sup>い</sup>罪 <sup>にん</sup>人 <sup>たら</sup>ば、  
<sup>あに</sup>豈 <sup>つみ</sup>ハリストスは <sup>えきしや</sup>罪の <sup>しか</sup>役 <sup>けだしも</sup>者 <sup>わ</sup>たるか。 <sup>こぼ</sup>非 <sup>もの</sup>らず。 <sup>われまたこれ</sup>蓋 <sup>た</sup>若し <sup>た</sup>我が <sup>た</sup>毀 <sup>た</sup>ち <sup>た</sup>たる <sup>た</sup>者、<sup>た</sup>我 <sup>た</sup>復 <sup>た</sup>之 <sup>た</sup>を <sup>た</sup>建 <sup>た</sup>て <sup>た</sup>ば、  
<sup>すなわち</sup>則 <sup>おのれ</sup>己 <sup>ざい</sup>の <sup>しめ</sup>罪 <sup>われりっぼう</sup>人 <sup>よ</sup>たる <sup>りっぼう</sup>を <sup>ため</sup>示 <sup>し</sup>す <sup>かみ</sup>なり。 <sup>ため</sup>我 <sup>い</sup>律 <sup>い</sup>法 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>由 <sup>い</sup>り <sup>い</sup>て <sup>い</sup>律 <sup>い</sup>法 <sup>い</sup>の <sup>い</sup>爲 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>死 <sup>い</sup>せ <sup>い</sup>り、<sup>い</sup>神 <sup>い</sup>の <sup>い</sup>爲 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>生 <sup>い</sup>き <sup>い</sup>ん <sup>い</sup>す <sup>い</sup>る <sup>い</sup>に <sup>い</sup>非 <sup>い</sup>ず、<sup>い</sup>即 <sup>い</sup>ハ <sup>い</sup>リス <sup>い</sup>ト <sup>い</sup>ス <sup>い</sup>と <sup>い</sup>共 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>十 <sup>い</sup>字 <sup>い</sup>架 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>釘 <sup>い</sup>せ <sup>い</sup>ら <sup>い</sup>れ <sup>い</sup>た <sup>い</sup>り。 <sup>い</sup>既 <sup>い</sup>に <sup>い</sup>我 <sup>い</sup>生 <sup>い</sup>く <sup>い</sup>る <sup>い</sup>に <sup>い</sup>非 <sup>い</sup>ず、<sup>い</sup>即 <sup>い</sup>ハ <sup>い</sup>リス

われ うち い わ いまにきたい あ い われ あい わ たため おのれ す  
トスは我の中に生きるなり。我が今 肉体に在りて生きるは、我を愛して我が爲に己を捨て

かみ こ しん よ い  
し神の子を信ずるに由りて生きるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあって義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであるか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるのであれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

\*\*\*\*\*

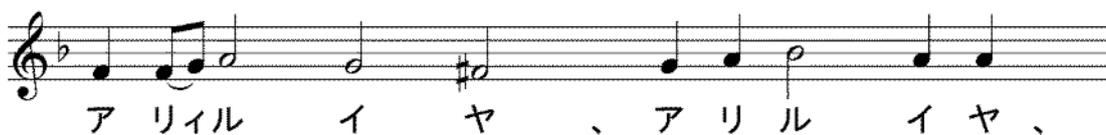
【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

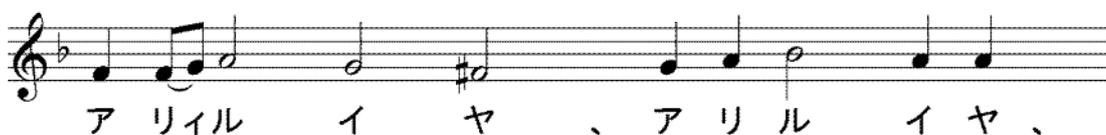
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

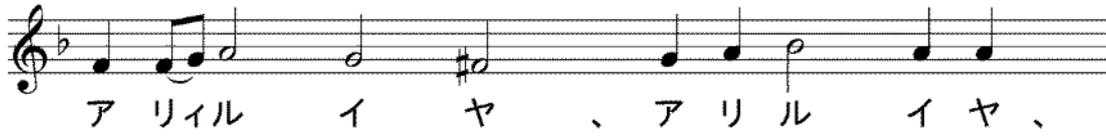


誦經) <sup>かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんぺい せいちよく けんぺい</sup> 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、





誦經) <sup>なんぢ ぎ あい ふほう にく</sup> 爾は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) ( <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

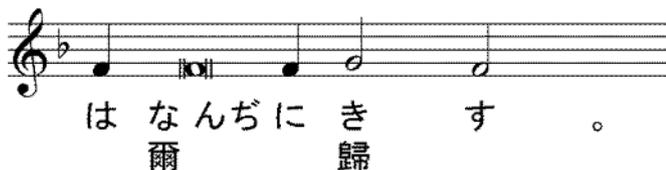
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 <sup>エヴァンゲリオン</sup> 福音經 ルカ福音書35端 8章5~15節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き しゅ さ たとえ もう い ま もの そのたね ま ため い</sup> 謹みて聽くべし、主は左の譬を設けて曰えり、播く者は其種を播かん爲に出でたり、

ま ときみち かたわら お もの すなわちふ またそら とりこれ ついば いし うえ  
 播く時路の 旁 に遺ちし者あり、乃 踐まれたり、又天空の鳥 之を 啄 めり。石の上に  
 お もの も い か うるおい ゆえ いばら うち お もの いばらとも  
 遺ちし者あり、萌え出でて稿れたり、潤 澤なきが故なり。棘 の中に遺ちし者あり、棘 共  
 の これ おお よきち お もの も い み むす ひやくばい これ  
 に長びて、之を蔽えり。沃壤に遺ちし者あり、萌え出でて、實を結ぶこと 百 倍せり。之を  
 い よ みみ き う もの き そのもんとかれ と い こ たとえ なに  
 言いて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。其 門徒彼に問いて曰えり、此の 譬 は何ぞ。  
 かれい なんぢら かみ くに おうぎ し あた た もの たとえ もち  
 彼曰えり、爾 等には神の國の奥義を知ること 與えられたれども、他の者には 譬 を用い  
 る、彼等視れども見ず、聽けども悟らざる爲なり。此の 譬 の義は左の如し、種は神の 言  
 みち かたわら もの こ き のちあくまた そのころ ことば うば かれら  
 なり。路の 旁 の者は、是れ聽けども、後 惡魔來りて、其 心 より 言 を奪う、彼等が  
 しん すく ため いし うえ もの こ き ときよるこ ことば う おのれ  
 信じて救われざらん爲なり。石の上の者は、是れ聽く時 喜 びて 言 を受くれども、己に  
 ね しばら しん いぎない とし そむ いばら うち お もの こ き き しこう  
 根なくして 暫 く信じ、誘惑の時に背く。棘 の中に遺ちし者は、是れ聽きて去り、而 し  
 どせい おもんばかり たから たのしみ おお み むす よきち お もの こ ことば  
 て度生の 慮 と貨財と宴樂とに蔽われて、實を結ばず。沃壤に遺ちし者は、是れ 言 を  
 き せいけつりょうぜん こころ これ まも にんたい み むす これ い よ みみ  
 聽きて、清潔 良 善なる 心 に之を守り、忍耐して實を結ぶ。之を言いて呼べり、耳あ  
 りて聽くを得る者は聽くべし。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 主は一つの譬で話をされた、「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらと一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。弟子たちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。この譬はこういう意味である。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時は来ると、信仰を捨てる人たちのことである。いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかいや富や快樂にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮



※聖体礼儀3（金口イオアン）へ